

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

学位申請者	小 濱 聖 子【論文博士】 (比較社会文化学専攻 平成22年3月単位修得退学)	要 旨
論文題目	白隠の修行観	<p>本論文は、日本近世の禅僧である白隠慧鶴の思想構造について、多角的な観点から解明を試みたものである。日本仏教思想史の中でも、近世仏教は、長らく「墮落仏教」として価値の低いものとされ、個々の思想家の研究も、親鸞や道元というような中世仏教の思想家たちと比べると進んでいない面が目立つが、白隠についても例外ではなく、日本臨済宗中興の祖として重要な意味をもつ存在であるにも関わらず、白隠に対する関心は、「軟蘇の法」などの身体修行や禅画などに限定されてしまい、その思想に対する研究業績は未だ蓄積されているとは言い難い状況である。そのような中で小濱聖子氏の本論文は、白隠の禅思想の全体像を多様な側面から明らかにした労作として評価することができる。</p> <p>小濱氏の白隠思想の理解を一言で特徴付けるとするならば、それは、白隠の思想における創造的な無限の「循環」を的確に指摘し、それを白隠の漢文著作も含めたテキスト解釈を基盤として解明したことである。</p> <p>第1部をなす第1章と第2章では、「白隠の研究的論文としては唯一のもの」とされる『四智弁』に基いて、白隠の修行が、時間的な推移としては、1見性体験（「さとり」体験）、2観照三昧 3公案参究、4末後一句（伝法）・衆生救済として構造的に捉えられる。これは、四智（大円鏡智、平等性智、妙観察智、成所作智）のそれぞれに対応している。そして、ここで重要なのが、これらの四智が漸進的に深化するという事とともに、法界体性智という究極的な悟りの智慧の同時的な顕現でもあるという事の指摘である。これは禅思想独自の「修証一等」（修行と悟りとの循環）の白隠における表現であり、このことを難解な漢文著作の読解を通して明示した点に、本論文の白隠研究としての大きな意義があるものと考えられる。</p> <p>さらに、第2部では、第1部で解明された白隠思想の構造がどのようなかたちで具体的な修行の場面において顕れ説明されていくのかを、「報恩」（第3章）、「戒」（第4章）、「念仏と禅との比較」（第5章）という観点から検討している。これらにおいても、丁寧なテキスト解釈に基づいて説得的な議論が展開されている。</p>
審査委員	(主査) 教授 高 島 元 洋	
	准教授 三 浦 謙	
	助教 中 野 裕 考	
	教授 内 藤 俊 史	
	東京大学 教授 頼 住 光 子	